慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	みっともない出会い
Sub Title	
Author	高橋, 昌男(Takahashi, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.372- 373
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0372

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

みっともない出会い

高橋昌男

あれは学部の三年生のときだったと思う、後期の試験が終ってしばらくしてから、白井助教授から呼出し状がきて、私は春休みで閑散とした三田山上へ出かけて行った。記憶に誤りがなければ、昭和三十二年のことだ。

こんな時期の呼出しにろくなことのあった験しはなく、私は重い気持で、奥まった場所にある白い研究室棟の玄関ホールへはいって行った。受付に来意を通じると、ほどなく白皙痩軀の白井助教授が「やァー」といいながら出て来られて、私を面談室のような小部屋に請じ入れた。そして畏まって坐る私に向って、吃るような口調で、フランス文学史の試験の結果がまるで駄目なので追試験をうけるようにと告げた。

私が赤面してこっくりをすると、助教授はさらに追討ちをかけるように、じつに朗らかにいってのけた。

「点を教えましょう。二十六点です。これはね、慶応の仏文科始まって以来の最低の成績ですよ」。

私が無言のまま逃れるように部屋を出たのはもちろんだが、山を下りながら、「それは光栄です」とか何とか威勢のいい言葉を返せばよかったと悔やんだ。みっともない話をご披露したが、じつはこのときが、私が白井先生と個人的に接触した最初だったのである。

それからすこし経って、先生は渡仏したように憶えている。期間は半年かそこいらだったろう。帰ってみえたのは四年生の夏の終り頃で、ちょうど私は卒業論文の準備などそっちのけで、文学部自治会の機関誌『文林』のために「中世抄」と題する恋あり冒険ありの三百枚の小説を書いていた。学校へはほとんど出なかった。やがて出来上がったその小説を、どういう加減でか、先生はばかに持ち上げてくれた。私が気をよくしたのは当然で、このことがその後の永い師弟の誼(よしみ)を深める機縁となった。

白井先生とのお付き合いのあれこれを書き付けて行ったら限りがないので止めるが、ただ、先生と苦労を共に

した戦後第四次『三田文学』の編集時代のことだけは、省くわけにはいかない。第四次『三田文学』は昭和三十三年九月に、何人かの俊才たちによって復刊されたのだが、いかなる仕儀か、かれらが二、三号出した時点でとつぜん退陣し、そのあとをまるでその気のなかった私が引き継ぐことになったのである。どうやら仕掛人はいまは亡い山川方夫らしかった。私は大いに困却した。山川さん初め、おおぜいの先輩が後押ししてくれるとはいっても、俄かのことで、手許に原稿一本ないのである。

そんな私を励まし――励ますばかりでなく、企画や実務の面でいろいろと力を貸して下さったのが、編集委員の一人である白井先生だった。企画についていうなら、たとえば清水徹さんの評論とマルグリット・デュラスの小説「モデラート・カンタービレ」（田中倫郎さん訳）で評判になったアンチ・ロマン特集は、先生の発案になるものだし、永井荷風追悼号をいそぎ編まねばならなかったとき、村松剛さんから、中央公論社の近藤信行さんが荷風論を執筆中という、耳よりな情報を仕入れてきたのも先生であった。たしかに先生は責任感のつよい、いざとなると偉ぶらずに気軽に行動を起こす人であるけれど、この時期、作家志望の教え子がよほど頼りなく思われたにちがいない。

その頃からかぞえて二十有余年。最近は、先生とは文壇関係のパーティかなにかで顔を合わせることのほうが多い。そんなとき、グラスを手にしたほろ酔い気分の先生が、手伝いに狩り出された銀座のクラブの女性たちと上機嫌で語らっている場面によく出くわすが、卑しさのみじんもない、あのおっとり構えた、洒脱な態度物腰は、見ていてじつに気持がいい。夜の銀座においても、先生はまだまだ現役でありつづけるだろう。

（作家・昭和三十三年仏文科卒）

「白井浩司先生と私」

石原　優

いささか誇張した表現かもしれないが、一冊の本との